

ヒラメの種苗生産について*

平本義春・小林啓二

ヒラメの放流用種苗を量産する目的で、昭和49年度から水槽内の自然産卵による採卵およびふ化仔魚と定着後の稚魚の飼育試験を行い次の結果を得た。

1 雌親魚4尾(全長60.5~71.5 cm)、雄親魚8尾(全長50.0 cm~72.5 cm)、計12尾を用い、昭和52年3月16日(水温14.5℃)~6月29日(水温21.4℃)の106日間に78日の産卵がみられた。雌親魚1尾の平均産卵回数は19.5回であり、ヒラメは多回産卵魚であることが明らかになった。産卵時刻は主として0~6時の間である。総産卵数は $16,172 \times 10^3$ 粒であり、雌親魚1尾の平均産卵数は $4,043 \times 10^3$ 粒であった。また産卵盛期は3月下旬~4月下旬の40日であった。ふ化率は1日の産卵数が多い時に高い傾向を示し、産卵期の前半が80%と高く、後半は35%と低かった。産卵期を通算したふ化率は76%であった。

2 1、4および10トン水槽を用いてシオミズツボムシ、アルテミア幼生を餌料として、ふ化仔魚を変態が完了するまで(34~41日、全長12.5~16.0 mm)飼育した。水槽の大きさごとに平均した歩留りは、1トン水槽で52%、4トン水槽で92%および10トン水槽で38%であり、単位生産量としては、1トン水槽で5,000~7,500尾/ m^2 、4トン水槽で11,500尾/ m^2 、10トン水槽で3,600~8,000尾/ m^2 の変態を完了した稚魚を生産した。

変態を完了した稚魚を陸上水槽の網生簀に収容し(収容密度4,300~5,900尾/ m^2)、アルテミアと養成アルテミアを餌料として25日間(ふ化後68日)飼育して、平均全長30.4 mmの稚魚を3,300~5,000尾/ m^2 生産した。(ふ化仔魚からの歩留り41.5%)。

仔稚魚の飼育中に発生した個体の異常(病気)は異物飲み込み、腹水症、腸管白濁症(仮称)等であり、また変態を完了した稚魚に17~20%の色素異常個体が観察された。

*本研究の詳細は、栽培技研、8(1)、41~51、(1979)に記載。